

EMI Angel DOR-0041
STEREO 45RPM

MASTER PRESS / 45

KARAJAN

FINLANDIA tone poem op.26 (J Sibelius)

交響詩「フィンランディア」(J. シベリウス) 9' 30"

MOLDAU (B.Smetana)

交響詩「モルダウ」(「我が祖国」より)(B.スメタナ) 12' 42"

BERLIN PHILHARMONIC ORCHESTRA
conducted by HERBERT VON KARAJAN



DAM
Deutsche Kammerdeutsche Audio Member's Club

制作にあたって

最近、各社からオーディオ・マニア向のレコードが続々と発売されており、DAMオリジナル・オーディオ・チェック・レコードも今回で12番目のアルバムをお届けすることになりました。

DAMは常に、市販レコードでは実現されにくく、かつわざわざオーディオ・チェック・レコードとは一味ちがった内容のものを、と心がけながら企画しております。

名曲・名演、そして名録音というものが、このシリーズの制作ボリュームですが、3拍子そろったアルバムとして、今回は人気のあるオーケストラの小品で、なおかつ全くイメージの異なる、シベリウスの「フィンランディア」とスマタナの「モルダウ」をカップリングしてみました。

このシベリウスの「フィンランディア」という曲を皆様も良く御存知のことだと思います。ところがこれだけ有名なわりには、意外なほど指揮者といわれる人達のレコードが少ないのです。しかしカラヤンは例外で、この曲を4度も録音しており、今回は日本でこの1月に発売（東芝EMI EAC-80377）になったばかりの最新録音を使用いたしました。

カラヤン～ベルリン・フィルは昨年も来日して、ペートーベンやブラームスのプログラムで話題をまいておりましたが、このシベリウスも得意のレパートリーの一つです。特にこの「フィンランディア」はカラヤン嫌いの方でも脱帽せざるを得ない、素晴らしい名演といつても良いのではないかと思います。その名演が45回転ハイレベル・カッティング・マスター・プレス盤ならではの、圧倒的な音の洪水となって、迫ってくるはずです。

ところで、スマタナの「モルダウ」もこれまた、親しまれている曲ですが、こちらの方は、名盤がひしめいています。の中でもカラヤンの「モルダウ」とドボルザクの「新世界交響曲」をカップリングしたアルバムは昔から名盤として定評の高いものです。カラヤンはこのカップリングで3度録音しなおしておりますが、今回のレコードに収録されたのは、昨年の暮に発売になった（東芝EMI EAC-80354）最新録音です。

最近のカラヤン～ベルリン・フィルは、音楽の静かな部分を特に念入に演奏し、他に比類がない美しい響きをかもしだすのが、ひとつ傾向となっています。

しかし、「モルダウ」という曲は、レコードでは「新世界交響曲」とカップリングされることが多い、1時間近い詰め込カッティングの犠牲となってしまい、音質的には不利にならざるを得ません。そこで今回は、この「モルダウ」の美しさを充分に引きだすために、レコード片面をいっぱいに使用して、ハイレベル・カッティングいたしましたので、カラヤン指揮ベルリン・フィルの透明で清冽な管弦楽の美しい響きを、堪能していただけることと思います。

とにかく、このレコードの両面が、ともに満足できるように、再生装置を総合的に調整してみてください。

そしてこのレコードを単なる“音のチェック用”としてだけではなく、音楽そのものを楽しんでい

ただければ幸いです。

DAMいたしましては、今後も皆様のトータル・オーディオ・ライフにお役に立つ、ユニークなソフトウェアを開発したいと考えておりますので、よろしく御支援のほど、お願ひ申し上げます。

なお、レコード化にあたり、東芝EMI(株)をはじめ関係各位に多大な御協力をいただきましたことを、心からお礼申し上げます。

DAM推進委員会

このレコードを聴いて

■シベリウス／交響詩「フィンランディア」

●トレース能力のチェック

A面の盤面をよく見ると、通常のレコードと異なるところがあるのにお気づきになることだろう。全面にわたって、ぞっとするような大振幅の音溝が連続して刻まれていることである。カラヤン指揮、ベルリン・フィルのスケール感の雄大な力強い演奏に含まれている多量の音情報をそのままDAMの会員の皆さんに提供したいという配慮から、45回転カッティング、マスター・プレスという高度なレコード制作技術を駆使するとともに、カッティング・レベルを通常よりかなり高く設定しているからである。

したがって、この「フィンランディア」に刻まれている多量の音情報を十分に引き出すために、まず問題になるのは、針先のトレース能力である。冒頭の低音の管楽器とコントラバスによる激しい序奏にティンパニーの連打が加わると、早くもピーク・メーターの針はスケール・アウトしたままという恐ろしい光景がくりひろげられ、最後の、ロシアの圧政に対する祖国フィンランドの不屈の闘志を象徴するかのように力強く奏されるクライマックスに至るまで、ピーク・メーターのスケール・アウトが続発する。

これらのピーク・レベルで再生音が歪む場合の最大の原因は、カートリッジの針先が音溝を完全にトレースしていないことによると考えて間違いない。今日市販されているカートリッジの大部分はコンプライアンスが改善されており、コンプライアンスの不足でトレース不能になることはほとんど考えられず、むしろ、針先へのゴミの附着、針先の磨耗、針圧の不適正、トーンアームの動作不良、ターンテーブルの傾斜など、レコード・プレーヤー全体の使いこなしに問題がある場合が圧倒的に多い。

一般に、レコードや針先の磨耗という面では針圧は軽い方が有利であると考えがちだが、針圧が軽すぎるとかえって音溝の壁を破損してしまうことがある。針圧が軽すぎる場合の針先の動きを追ってみると、大振幅の音溝にさしかかった針先が鋭く曲がりくねった音溝の壁面でけり上げられ、浮き上った針先が音溝に落下する際に音溝の壁に傷をつけるという動きを繰り返すことが考えられるからである。カートリッジの適正針圧はある巾をもって指定されていることが多いが、巾をもって指定されている適正針圧範囲の上限の針圧を最適針圧と考えるようにしたいものである。

また、針を降ろす前には必ず、レコード・クリーナーでレコードの表面をきれいにし、定期的にスタイラス・クリーナーで針先をクリーニングす

ることも忘れてはならない。

●ダイナミック・レンジのチェック

「フィンランディア」で再生音が歪むもう一つの原因として、再生システムのダイナミック・マージンに十分な余裕がない場合も考えられる。アンプのパワーに十分な余裕がない場合、あるいは、スピーカーの最大許容入力が小さい場合に、ピーク・レベルで音が伸び切れずに歪むこともあります。また、高出力カートリッジを使用している場合は、まれなことだが、アンプによってはピーク・レベルで過大入力となり、アンプの入力段で歪んでしまうこともあるだろう。

●解像力のチェック

この素晴らしい録音の特長の一つとして、楽器の解像度がすぐれていることを挙げなければならない。カートリッジにも編成の大きなオーケストラの各楽器をよく分解して再生するものと、分解しにくいものとがあるが、スピーカー・システムの方がその差を一層顕著に表現する傾向がある。再生周波数特性、音質のバランス、あるいは、マルチ・ウェイの場合の各ユニットの音色のつながりなどとともに、解像力もスピーカー・システムの重要な特性の一つに考えられるようになったことはご存知の通りだが、その解像力のチェックに適したソースである。

■スマタナ／交響詩「わが祖国」～モルダウ

●周波数特性と音質のバランスのチェック

「フィンランディア」もそうだが、この「モルダウ」でも、ロー・エンドがよく伸びて量感のある低音楽器の力強い響きが聴かれ、冒頭でモルダウ河の水源を描写するフルートの澄明でつややかな美しい音色からもわかるように、各楽器の音色の色彩感が鮮やかに再現されるすぐれた録音である。

レコード再生システムは、再生周波数特性が可聴帯域を完全にカバーするとともに、低音域と高音域の再生能力がバランスしていることが要求されるが、とくに、低音域の再生能力は、スピーカー・システムがブックシェルフ型の場合、その設置のしかたによって大きく変化するものである。スピーカーは、床面と二つの壁面が交わる、いわゆる部屋のコーナーにぴったりとつけて設置すると、低音の量感が出すぎて不自然になり、床面や壁面から離すにしたがって、低音の量感が少なくなる性質がある。「モルダウ」を再生しながら、スピーカーを上下、前後、左右に細かく移動して、低音の量感や質感が最も自然になる位置を探し出すようにし、合わせて、トゥイーター・スコーカーのアッテネーターの操作で音質調整をおこなうとよい。この作業には、長い時間と、根気が必要である。

●スピーカーの接続のチェック

しばしばあることだが、もし、「フィンランディア」や「モルダウ」の後半で聴かれるはずの朗々とした低音楽器の響きの量感が不足するようなら、左右二本のスピーカーのうちのどちらか、極性が逆に接続されていないかどうかチェックしてみる必要がある。極めて初步のことだが、スピーカーが逆相に接続されていることに気付かずに、永い間低音不足に悩んだという例は非常に多いのだ。

オーディオ評論家 三井 啓

カラヤンについて

カラヤンは近年、60年代に録音した曲目をぞくぞく再録音している。響きのよい「フィルハーモニー・ホール」の完成、録音技術の長足の進歩などの理由もあるが、なんと言ってもカラヤンの美学上の考え方の変化が、彼をして多くの再録音に向かわせているのだと考えられよう。60年代、古典的な形式美を磨くことに力を注いだ彼の音楽は、近年、さらに加えて徹底した美感を追求する方向に向かい、一種驚異的な高みに到達していると言えるようだ。

「フィンランディア」の冒頭から感じられるつややかで輝かしい音色、「モルダウ」の弦合奏にきく、スムーズで角のとれた、よく流れる旋律。静かに動への実に見事な移りゆきから生まれる、力強くスリリングな高揚と興奮。それらが一体となって、彫琢の限りをつくした響きの中に、官能的といえる程の美を創りだしていく。このスペシャル・カップリングの一枚、すばらしい録音とあいまって、いまや頂点を極めたかの感さえあるカラヤン美学を味わう、うってつけの一枚といえよう。

簡単にカラヤンの略歴を記しておこう。1908年ザルツブルク生。バウムガルトナーを師として、1927年デビュー。34年アーヘン歌劇場を皮切りに、ベルリン国立歌劇場、ウィーン・フィル、スカラ座、フィルハーモニア、ベルリン・フィル（1955年より常任）、パリ管等で指揮をとて今日に至っている。来日は54、57、59、66、70、73年に統じて、77年は7度目。その鮮かな名演は強烈な印象を与えて、まだ記憶に新しい。

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は1882年創立。フォン・ビューロー、ニキシュ、フルトヴェングラーといった、鉢々たる歴代常任指揮者のあとをうけてカラヤンを迎へ、今日に至る。名実ともに世界最高に位置する楽団であり、殆どのパートに（フルートのツェラー、クラリネットのライスター、ヴァイオリンのシュヴァルベなど）ソリスト級の奏者を多く擁しているが、それらの華やかな個性がけして独走することなく、見事な調和を保って機能し、絶妙なアンサンブルを生みだしている。

真庭 健

曲目解説

今、ぼくらはロックだ、ジャズだ、クロスオーバーだ——そんな類いの音楽を、もうこれは、あたりまえにあるものとして受けとめ、味わい、批評などさえしている。本来の日本の文化が持つ固有の美学や感性から遠く隔たったものを、何一つ違和感なく、享受する感覚が、ぼくらの中に確固として出来あがっているのだと言えるだろう。しかし考えてみればこの感覚、一人前の市民権を持ったのはたかだか2、30年前のこと、どだい、洋楽が我が国に伝來して、実は100年ほどの時間しか経っていないのだ。

それ迄固有の文化を持つところに、もうひとつ、まるっきり異った文化が入ってきた驚き。ぼくらは不幸にも実感として味わったことが無い。が、それは想像に難くないだろう——まるっきり、理解出来ない、しかしどこか感覚ではほうっておけない、いらだちと不安と、そして強い好奇と期待

…たとえてみれば、あの「未知との遭遇」など、どうだろうか。まばゆいばかりのスター・シップ、換言すれば異種文化が、はじめてぼくらの前に、殆ど想像もつかないかたちで姿をあらわす。ぼくらは、そのままゆき、美しさに啞然してしまう。おそらく100年前、日本人と〈洋楽〉との遭遇も、そんな感じでなされたのではないだろうかと考える。

優れた異種文化との出会いを経て、落ちつきをとり戻した人間が、やがて始めるのは、それを自分の中にとり入れようとする努力だ。忠実な〈模倣〉への努力。が、やがて、その技術の使いこなしを充分に習得すると、何とかそれを、より自分たちに合ったしきりしたものにしたいという欲求が芽生えてくる。そこで考えつくのが、従来の、自前の文化との〈ドッキング〉という方法だ。新しい材料を自前の技術で料理する、あるいはその逆に自前の材料を新技術で料理する——いずれにしてもこの方法、ひとつの文化が別の土壤に根づくためには、どうしても通過せざるを得ないパターンとしてとらえることが出来るだろう。

日本の〈洋楽〉がそうであったように、東欧や北欧、ロシアに於ける〈洋楽〉も、同じような出会いがあった。誤解のないよう、言っておこう。〈洋楽〉(ここでは「クラシック音楽」という)と、広くヨーロッパ全域のもののように思ひがちだが、実は本来ドイツ=オーストリアを中心とした西欧の、ごくごく地域的な音楽が発展していったものなのだ。(今日、ぼくらの国のコンサート・プログラミングや批評家たちの、根強いドイツ=オーストリア音楽への信仰は、逆説的にその出自を証明していると言えば言いすぎだろうか。)その〈洋楽〉が、ヨーロッパの片田舎まで伝播し流布していく過程で辿ったのが、当然、〈模倣〉→〈ドッキング〉というパターンだった。

もうひとつ、言い添えておかねばならない。それはヨーロッパ近代化の波だ。19世紀半ば、ロマン主義の洗礼を受けて近代的自我に目覚めたひとびとたちは、それ迄の大団隸属に甘んじることなく、民族自決を、そして独立を主張しはじめる。固有の文化を求める動きが同時多発的に起つてくる。その動きが触媒となって、自国の音楽文化を創りだす気運が大きく盛り上り、そうして生みだされた音楽、それをぼくらは〈国民楽派〉と呼んでいるのだ。

〈国民楽派〉、その大きな開花としてのスマタナ(1824~1884)と、豊かな結実となったシベリウス(1865~1957)の2つの作品をカッピングしたこのレコードで、ぼくらは、したたかな、ひとつの時代の証言を聞くことが出来るのだ。

●シベリウス：交響詩「フィンランディア」

作曲者34歳(1899)の時の作品。当時、フィンランドは隣国ロシアの帝政支配下にあり、様々な政治的弾圧が加えられていた。しかし、これをよしとしない学生や知識人たちの手で、少しずつではあるが、独立に向けての根づよいレジスタンス運動が続けられていた。そうした中で、フィンランドの太古から現代に至る歴史と、さらには祖国独立への願いをこめた史劇「歴史の場面」上演が企てられ、血氣さかんなシベリウスは4曲の付隨音楽を作曲した。後に第4曲が独立して「フィン

ランディア」と呼ばれ、民衆から熱狂的な喝采を浴びることとなつたが、曲の持つ愛国的なアシテーション度の強さと、民衆の興奮がひいてはクーデター騒ぎにつながるのを怖れたカイライ政権は、一時、この曲の演奏を禁止したといふいきさつまで、伝わっている。ロック・グループ〈○○○〉のコンサートに中学生以下は行ってはいけない、などという○○県PTAのオフレの類いになにやら似ていなくもないが、考えてみればこの「フィンランディア」は当時レッキとしたクラシックの〈現代音楽〉なのであって、今日、ぼくらの国の〈現代音楽〉がそのような強い力を持つことなど、想像もつかない。演奏禁止になるほどの強い〈現代音楽〉、誰か書く人いないものだろうか?

曲は、憤懣やるかたないといった調子の、激しい金管によって始まり、次第に激昂の度合いを高めて行くが、やがて木管による、素朴な慰めに満ちた民謡風旋律にとってかわられる。これが弦に移り、ひとしきり美しく歌われたあと、再び速いテンポに戻って、圧倒的な興奮のうちに曲を閉じる。ちなみにフィンランドは、この曲初演の20年後(1918)、念願の独立をなしごけたのだった。

●スマタナ：交響詩「モルダウ」

「私はこどものときからドイツ語での授業だけになじんできたが、これからはドイツ語と同じくらいチェコ語も、話すのにも書くのにも樂々とできるようにしなければならない……」(1861年12月付スマタナの日記より/武川寛海訳)

上記の文章、スマタナがチェコ人(正確にはボヘミア)であることを念頭に置いたうえで、お読みいただきたい。当時、ボヘミアはドイツの支配下にあり、ボヘミア、モラヴィア、スロヴァキアなどが合併して独立するのは、1918年まで待たねばならなかった。日本による朝鮮侵略をはじめ、支配する側の為政者がその国民から母國語をとりあげてしまうやり口は、近・現代史に数限りなく見受けられる。しかし、そうした無理じいが強い反撥を受けるのは必至であり、ボヘミアもチェコ語を求める強い復権運動が生まれ(そんな状況下、スマタナのように、母國語を勉強しなければ……という悲劇もおこつてくる)、やがてそれは激しい民族運動へと高まって行くのだった。

1874年から79年にかけて創られた一連の交響詩——後に「わが祖国」と題される——も、こういった機運に応えたスマタナの、激しい祖国愛の発露と見てとることが出来るだろう。全6曲中2番目(1874)に書かれたこの曲は、ブラハへと流れる河の名がつけられている。

まず2本のフルートによって、モルダウの水源となっている泉の様子が描かれてはじまる。やがて水量も豊かさを増し、弦が美しい河の主題をたっぷりと奏する。河は森をくぐり(岸からはホルンによる狩猟の響き)、平野に出て農民の楽しげな婚礼の踊り(弦)を見ながら流れしていく。夕暮れから夜を迎え、ゆっくりしたテンポでの弦の和音は、河面の月光のきらめきを暗示する。やがて最初の河の主題が戻り、陽光の中、水しぶきをあげながら急流を通つて河幅は広くなり、遙かに古城を眺めつつ、あたかもブラハの市へ入つて行くように、豊かに大きく拡りながら終結を迎える……。

真庭 健

マスター・プレスについて

マスター・プレスのことについてふれる前に、まず一般的なレコードの製造工程の説明から始めましょう。

①マスター・テープ 全てのレコード(ただしダイレクトカッティング盤は除く)の音源は、この様なテープに収録されて録音スタジオから、カッティング工程におくられます。このレコードの場合は、マスター・テープの状態でイギリスのEMI本社から東芝EMI(株)に送られてきたわけです。なお、このマスター・テープの規格は一般に、1インチ、2トラックで、テープ・スピードは38cm/sec又は76cm/secとなっています。

②ラッカーマスター ラッカーパーは、アルミの円盤に硝化綿を塗布したもので、その表面はとても柔らかです。これにマスター・テープの音がカッティング・マシンによって溝として刻み込まれます。

断面
銀鏡処理
ニッケル・メッキ
はく離

顕微鏡による溝検査(溝の溝との接觸、溝の途切、溝幅や深さのチェック等)終了後、次の工程に進みます。

③メタル・マスター ラッカーパー盤にメッキ処理をして、それをはがすと凸型(メタル・マスター)ができます。このメタル・マスターで直接プレスをすることを、マスター・プレスというわけです。

メッキ処理
はく離

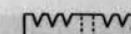
④マザー メタル・マスターに再度メッキ処理をして、はく離すると、マザーができます。これはラッカーパー盤と同じ凹型ですが、ラッカーパー盤と違い、金属性なのでカートリッジで検聴することができます。

マザー
カートリッジ

⑤スタンパー マザーにメッキ処理をして、はく離するとスタンパーとなります。スタンパーは一枚のマザーから複数枚数の製造が可能であり、レコードのプレス枚数に

応じて、スタンパーが作製されることになります。

⑥レコード 12インチ(約30cm)
スタンパーがプレス機にかけられ、レコードが大量に生産されます。これで、レコードが完成!



以上が、通常のレコードの製作工程ですが、わかりいただけましたでしょうか。

マスター・プレスとは、以上の工程のうち④と⑤を省略して、いきなり⑥のレコードをプレスすることをいいます。

何故、このようなことをするのかといいますと、マスター・テープから直接カッティングされた、ラッカーパー盤が、極めてナチュラルで素晴らしい音質をもっているため、これを損うことなく、レコードにするべく、複製の工程を少くするのです。

写真の複製で、輪郭がぼけたり、テープをダビングするとS/Nが悪化して鮮度が落ちるのと同じように、高度な技術をもってしても、レコードの工程で複製をくり返すたびに、微妙な音の差を生じてくるのは、止むを得ないことといえます。

そこでこのような、マスター・プレスをとりあげたのですが、マスター・プレスにも欠点があります。それは極めてコストがかかり、又、大量生産がきかないということです。なにしろ、1枚のメタル・マスターでプレスできる限度は1,000枚内外とされています。今回DAMのマスター・プレスでは、安全を見込んで1枚のメタル・マスターからのプレスは500枚前後といたしました。ですから両面あわせて数10枚のラッカーパー盤をカッティングする必要があるわけで、おのずと製造コストも大幅にupすることになります。

今回、再びDAMがあえてこのマスター・プレスを採用したのは、カラヤン=ベルリン・フィルの新盤のマスター・テープの音が、「凄い」の一語につきため、それを極力損わずに本盤レコードにして会員の皆様にお聴きいただきたかったからに他なりません。

45回転30cmレコードとしては、恐らく世界に稀なマスター・プレスといえるでしょうし、盤質についても東芝EMI(株)の誇る「プロ・ユース材」を使用して、名実ともに最高品質のレコードをお届けできることになりました。

皆様の装置でじっくり御試聴のうえ、御感想をお寄せいただければ幸いです。

(M.W)



45回転、ハイレベル・カッティングについて

オーディオ・チェック・レコードとして企画された「DAM45」シリーズもすでに、EMIクラシックVol.4となり我々制作スタッフも回を重ねる度に、そのより完成されたオリジナル演奏の忠実な音楽性の再生に意欲的な闘志と、一方ディスクというきびしい物理的制約の中での挑戦又新たな意気込みと音の可能性を求め、再度EMIオリジナルマスター・テープの音質チェックを行い、「DAM45」レコードのサウンドポリシーをそれぞれ確認し合った。

ケンペ/ドレスデン「アルプス Sym」カラヤン/ベルリンフィル「タンホイザー」、プレヴィン/ロンドン響「青少年のための管弦楽入門」といざれも、EMI録音スタッフがほこる優秀録音のEMIサウンドであったが、またしても第一家庭電器さんが企画したのは当社が昨年の暮れに発売したばかりの、カラヤン/ベルリンフィル「フィンランディア」とは、まさに頭の下る思いと「DAM45」レコードに賭ける情熱はさすが最大の販売ネットをもつ第一家庭電器さんといつものことながら感心する次第であった。

あのベルリンフィルの研鑽された鮮鋭なバランスと洗いそれでいて繊細なサウンドを再現するには、先ずカッティングマシンはどれにするか、カッターヘッドは…から始まり、結局フィンランディアのあのシャープでダイナミックな、直接音と間接音の対比がすばらしい響きを出すには、過渡特性、位相特性の優秀さをもつSX-74、Neumannシステムをおいて他にないだろうという訳で、前回と同じシステムを使用した。

Tape Recorder Studer A-80vu/MKII
Drive Amplifier Neumann SAL-74
Cutting Lathe Neumann VMS-70
Cutting Head Neumann SX-74

特にブラストーンの録音再生は難しく、リニアリティ、ファンダメンタルとハーモニクスとの忠実性、又直接音と間接音との分解能、と要求されるサウンドであり、この点からも、ワイドレンジな、リニアリティの良いトーンキャラクターをもっているNeumannシステムは、ナチュラルなEMIサウンドを再現するにはもってこいのラインシステムだと思う。

さていよいよテストカッティングだが、まずカッティングレースのピッチ、ディップスコントロールを45 rpm用にセッティング、ターンテーブル回

転ストロボで確認する。ここで45 rpmを採用したそのメリットについて簡単にふれておきたい。

*45 rpmは線速度が33 rpmの1.35倍となる為に、歪、Fレンジ、Dレンジ等の物理的性能が全て改善される点にある。しかし反面収録時間が制約されるデメリットがある。これは非常に45 rpm盤を企画する時に頭を悩ます点で、例えば「青少年管弦楽入門」「タンホイザー序曲」の場合も、かなり困難が伴なったわけではあるが、あくまでも音楽性を無視したような物理的条件のみで、編集することが出来ないだけにプログラムが制約される。

最小限に録音時間を短くし余裕のあるカッティングをする為にも「DAM45」シリーズは全て片面10分程度の内容で企画統一されており（フィンランディア：9'30" モルダウ 12'42"）充分にカッティング条件をクリアにしている贅沢なレコードといえる。

*45rpm盤は33rpm盤より速度振幅は1.8倍即ち5.2dBの改善となる為それだけワイドレンジな再生が可能となる。

これはハイクオリティレコードとしてのオリジナルマスター・テープの完全な情報転写ということでは非常なメリットであり、リミッター、コンプレッサー等一切使用せずカッティングレベルも通常の+5~+7dB程度高くレコードディスク再生限界をギリギリの点までねらったものである。又、*レコードディスクの宿命ともいえる内周での、線速度低下による高域劣化、トレーシング歪（再生針の曲率半径に影響）現象があり、45rpmにすることで内周劣化を第2高調波歪に関係すると1/1.8に減少され、トレーシング性能の改善になり、より高忠実度再生の条件を可能にするものである。

以上のような45rpmを採用することでのメリットを、フィンランディア、モルダウの録音時間及び音楽構成をあらゆるカッティング条件にあてはめて溝や、ピッチコントロール、及びカッティングレベル、サーカスレベルのセッティングを完了！

いよいよテストカット開始である。
カッターヘッド、オン・テープ、スタート！モニターSPからあの莊厳で金管特有なシャープでしかも華麗ともいえる空間音場を感じさせるように鳴り響くさまは、真にカラヤン/ベルリンフィル・サウンドであり決してアコロバティックにならない処理はこれぞEMIサウンドであった。

このようにして物理的条件を満足すべくその再生限界とオリジナル演奏の忠実な再現を、完成さ

れたレコードディスクの音楽性としてどこに求めるか、数種類のカッティング・パターンを組んでテストカットをした。

数回のテストカットを行いその都度、スタッフ一同試聴室でヒヤリングをする。何回カッティングルームと試聴室を往復したことか！あるテストラッカーで、「すごい！」「バランスはいい」「これぞ45rpmサウンド！」と一同聴きほれていた瞬間「バリバリ！」とノイズ音——言わずと知れた溝切れ！カッターヘッドのリフトアップ現象でオーバーカッティングである。「やはり+7dBは無理だ」カッティングマンの一言でスタッフ一同ガッカリ！

このような厳しいテストカット——ヒヤリングのくり返し、数種類のカートリッジ、及びJBL、ALTEC、Tannoyのスピーカーの再生テストを重ねた上で最終決定を行い、本盤が出来上った時は我が恋人のようにかわいく愛着を感じる時である。

そして「やった！」という充実感と限界に挑戦した自己満足、又正直いってラッカー盤からマトリックス・プレスの工程をへて完成された時のレコードに対する音楽性価値……等何か不安と期待の入り混った一瞬でもあった。

特殊マスター・プレス採用の為、本盤の同じラッカー盤を7枚も（片面）カットしたことも付記しここにディスク化致しました。

きっとこのレコードを聴かれた方はより高いクオリティとリアルサウンドを充分に楽しみEMIサウンドに賛同していただけるものと確信しております。

レコード材質及び製造プロセスについては、東芝EMIプロフェッショナル、レコード仕様と同様現時点最高の製造技術を導入して品質の安定化を図っております。

尚このレコードはハイレベルでカッティングされている為、トレーシング時には針トビ、ビリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。
再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧（メーカー指定の重い方にセット）には充分気を付けて下さい。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 1/3回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)33 1/3回転レコードより線速度が早いので、針先のトレース性は良くなります、カートリッジを含むトーンアームの慣性などで軽針圧の場合正確にトレースしないこともあります。歪などの恐れのある場合針圧を許し得るまで増して下さい。

(3)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 1/3回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

●再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますので室温を15°C~20°C位に保って下さい。

レコード材質——プロユース材料使用



Photo by Y.F.

録音・カッティングデータ
フィンランディア
Recorded: 28 & 29 September 1976
Philharmonie, Berlin

Producer: Michel Glotz
Balance Engineer: Wolfgang Gülich

モルダウ
Recorded: 2 & 3 January, 1977
Philharmonie, Berlin
Producer: Michel Glotz
Balance Engineer: Wolfgang Gülich

Cutting Date: 24, April, 1978
Cutting Engineer: S.HARA
Y.OKAZAKI

企画：第一家庭電器株式会社DAM
製造：東芝EMI株式会社 MADE IN JAPAN
(DOR-0041) □